

木曾三川 歴史・文化の調査研究資料

# TRISSO

2013

春

Vol.86

平成25年



## 地域の歴史

幕末の動乱に揺れた桑名藩

---

## 地域の治水・利水施設

桑名湊の形成と発展

---

## 歴史記録

高須輪中の排水管理 第三編

高須輪中の揚水施設

---

## 研究資料

大喜多 啓介

伊勢湾台風からの復興と「木曾岬小唄」

---





# 幕末の動乱に揺れた

## 桑名藩

東海道の要衝であり、海運の拠点でもあった桑名を重要視した江戸幕府は、その藩主に親藩・譜代の有力な大名を任じてきました。幕末の桑名藩は、会津藩とともに幕府軍の主力として、討幕派と熾烈な戦いをくり広げました。

### 桑名藩主の系譜

関ヶ原の戦いののち、本多忠勝が一〇万石で桑名に入部しました。忠勝は、徳川四天王の一人として知られた徳川家康股肱の武將で、天文一七（一五四六）年の初陣以降数々の戦いで勇名を轟かせました。桑名に入った忠勝はただちに桑名城を改修し、都市計画を断行しました。これは「慶長の町割り」と呼ばれ、桑名市街の基礎として現在まで続いています。

忠勝の死後は、嫡男・忠政が跡を継ぎましたが、元和三（一六一七）年、先の大坂夏の陣の武功もあって、五万石を増増のうえ播州姫路に転封となりました。本多忠政転封の後に



蛤御門

は、徳川家康の異父弟・松平定勝が一一万七千石で桑名に入りました。定勝は、家康の母・於大が離縁の後に再嫁した久松俊勝との間に生まれた子で、家康にとって異父同母の弟にあたります。他の松平家と区別するときは、久松松平と称します。定勝の跡を継いだ次男の定行は、清浄な飲料水が得られない町民のために、寛永三（一六二六）年、町屋川より堀を開削して水道を造り、各所に井戸を設ける町屋御用水を建設しました。寛永一（一六二四）年、定行は、加増されて伊予松山一五万石に転封となりました。定行転封の後には、その弟・定綱が大垣から入部しました。定綱は名君の誉れ高く、鎮国公とも諡号され、鎮国大明神として祀られています。慶安三（一六五二）年、定綱が没すると次男・定良が後を継ぎましたが病弱で明暦三（一六五七）年に逝去しました。定良は独身であったため、伊予松山藩主松平定頼の三男・定重

が婿養子として桑名に入りました。宝永七（一七二〇）年、定重が越後高田に転封、代わって松平忠雅が備後福山より桑名に転封されました。以後、忠時―忠啓―忠功―忠和―忠翼―忠堯と七代一―三年に渡って桑名を統治しました。奥平松平家の祖は、長篠城守將として名高い奥平信昌の四男・忠明で、家康の養子となり松平姓を賜っています。文政六（一八二三）年、桑名領主

### 幕末の桑名藩と松平定敬

安政六（一八五九）年、桑名藩主となった定敬は、高須藩主松平義建の八男で尾張藩主・徳川慶勝や徳川茂徳、会津藩主・松平容保や石見浜田藩主・松平武成らの弟にあ

た



桑名城跡(九華公園)



桑名城跡の大砲

幕府の権威低下に伴い、京都には諸国から尊王攘夷派の過激志士らが集い、治安の悪化が懸念されたため、文久二（一八六二）年会津藩主・松平容保が京都守護職に就任しました。さらに元治元（一八六四）年には定敬が京都所司代に任命されます。こうして桑名藩は京都に出兵、会津藩とともに幕府軍の主力として、幕末の動乱に巻き込まれていきます。



鶴ヶ城

最初の本格的な戦闘は、元治元（一八六四）年の禁門の変（蛤御門の戦い）でした。朝廷内での失地回復を目指した長州藩は、約三〇〇〇の大軍を京都に進め、会津・桑名藩を主力とする幕府と対峙し、戦端が開かれました。早朝に始まった戦闘は昼には大勢が決し、長州軍は多くの戦死者を出し敗走しました。慶応二（一八六六）年、家茂は第二次長州征伐の途上大坂城で病に倒れ他界、将軍後継には一橋慶喜が就任しました。さらに翌年、親幕府派で容保・定敬を信任していた孝明天皇が崩御され、朝廷での後ろ盾を失った幕府の崩壊が現実味を帯びてきました。

■桑名藩主の推移

襲封年	藩主名
慶長 6年 (1601年)	本多 忠勝
慶長 15年 (1610年)	〃 忠政
元和 3年 (1617年)	松平(久松) 定勝
寛永 元年 (1624年)	〃 定行
寛永 12年 (1635年)	松平(久松) 定綱
承応 元年 (1652年)	〃 定良
明暦 3年 (1657年)	〃 定重
宝永 7年 (1710年)	松平(奥平) 忠雅
延享 3年 (1746年)	〃 忠時
明和 8年 (1771年)	〃 忠啓
天明 7年 (1787年)	〃 忠功
寛政 5年 (1793年)	〃 忠和
享和 2年 (1802年)	〃 忠翼
文政 4年 (1821年)	〃 忠堯
文政 6年 (1823年)	松平(久松) 定永
天保 9年 (1838年)	〃 定和
天保 12年 (1841年)	〃 定猷
安政 6年 (1859年)	〃 定敬
明治 2年 (1869年)	〃 定教

慶應二（一八六六）年、家茂は第二次長州征伐の途上大坂城で病に倒れ他界、将軍後継には一橋慶喜が就任しました。さらに翌年、親幕府派で容保・定敬を信任していた孝明天皇が崩御され、朝廷での後ろ盾を失った幕府の崩壊が現実味を帯びてきました。

慶喜とともに江戸に戻った定敬は、積極的に主戦論を主張しましたが、慶喜は恭順の姿勢を示し、容保と定

定敬の転戦

定敬のいない桑名藩は、桑名城での抗戦を主張する者や、江戸に上がつて定敬に従って戦うとする意見もあり、藩論は二転三転しました。しかし、周囲の藩はすでに新政府に従っており、兵力・財力的にも恭順以外の道はありませんでした。



戊辰忠魂碑

敬を登城禁止とします。江戸を退去した定敬は、桑名藩が有していた分領の越後柏崎に入り、ここで軍を編成して越後各地で新政府軍と交戦を重ねました。越後長岡藩降伏後は、会津に入つて兄・容保と共に戦いましたが、鶴ヶ城の陥落を目前にして、定敬は援軍を求めて米沢藩を頼りました。しかし、米沢藩はすでに恭順の意向で、入国を断られた定敬は仙台に向います。一方、会津で敗れた桑名軍は庄内藩に合力して奮戦しますが、庄内藩の降伏の際に共に降伏しました。仙台に逃れた定敬は、ここでも抗戦を決意していましたが、仙台藩の藩論は恭順に傾いていたため、榎本武揚の軍艦に同乗して函館に渡りました。五稜郭の陥落間近に、定敬は上海に密航逃亡しましたが、路銀が尽きて外国での逃亡を諦め、遂に新政府に降伏しました。

桑名藩は定敬のために取り潰しとなり滅亡しましたが、一八六九（明治二）年に再興を許され、先代定猷の嫡子・定教が桑名藩知事に任じられ、廃藩置県をむかえました。

参考文献

- 『桑名市史 本編』桑名市 昭和三四年
- 『日本地名大辞典・三重県』平成三年 角川書店
- 『桑名藩』郡義武 二〇〇九年 現代書館 平成二二年

地域の治水・利水施設

# 桑名湊の形成と発展

本曾三川が合流する河口部に位置する桑名は、室町時代に港町が形成されました。戦国期には「十楽の津」と呼ばれ商人による自治都市でした。江戸時代には、東海道七里の渡し場であるとともに、三川上流から運ばれる材木や米の集散地として栄えました。

## 桑名湊のはじまり

本曾三川の河口部に位置する桑名の地は、地理的に湊が発達する条件に恵まれていましたが、古代においては、集落の発達は西部丘陵地に

限られ、現在の桑名市街地は低地で、当時は海浜でした。その低地に最初に建立された寺院が、永承四（一〇四九）年の浄土寺であり、現在の市街地に集落が形成されたのは、平安時代中頃と推察されています。



七里の渡し

『袖野山見聞記』に、「其昔州崎三ツ二分レタリ。（中略）ワズカニ農漁ノ住居ナリシニ、イツシカ諸民繁昌シテ、カノ三州崎

モ名残ルノミニシテ、桑名三ヶ村トイエル頃ニナリス、又、夫ヨリ此所旅宿着岸ノ便ヨリ諸方往還ノ津トナリテ、民家甚タ繁昌セリトナリ」とあり、三つの州が陸地化して集落が形成され、やがて交通の便が良いことから津（湊）となつて、民家が多くなつていった経緯が表されています。

桑名が湊として栄えるようになった要因の一つに伊勢神宮の存在があります。伊勢神宮の荘園である御厨・御園は、平安中期から鎌倉初期に増大していますが、文治元（一一八五）年には神宮領を管理する神館が桑名に設置され、桑名郡・員弁郡から神宮に貢納される米などが桑名から海路で運送されるようになりまし。また、神宮の造営に使われる木材は、本曾川上流で採取され、川下りで桑名を中継して神宮に運送されました。

東国との海運も行われていたようで、応永一三（一四〇六）年とさ



浄土寺

れる鎌倉円覚寺正統院造営には、「桑名より海上を被下候」（円覚寺文書）とあり、桑名経由で運ばれた木曾材が使われています。

## 十楽の津

室町時代には、湊はますます繁栄し、連歌師宗長の旅日記には、「家が数千軒、船が数千艘、旅宿の火が星のようだ」と書かれています。

本曾三川と伊勢湾航行の中継基地として桑名湊で取り扱う物資が増えると、物資の保管や運送請負などを行う「津屋」「問屋」「納屋」などの交易商人が現れ、商業都市としても発展しました。

中世の商工業は、同業者が組合を結成して、皇室・貴族・神社仏閣などの権力者に保護料を払って、その庇護下で原料の入手や販売権などを独占していました。こうした中世的権威を否定し、各地からの商人の出入りを自由にし、課税免除・自由通商を保証したのが、楽市楽座です。商業の発展した桑名も「十楽の津」（十楽は極楽を意味し、座の制限を受けず自由に商売が出来る所）と呼ばれ、楽市楽座の色合いの強い自由都市であったと推察されています。ただ、楽市楽座が地域の支配者によって法制的に定められたものであるのに対して、桑名湊は当時の支配者も定かでなく、法的庇護があつたのか不明です。



住吉神社

自由都市・桑名は、「町衆」と呼ばれる町人による自治が行われていました。こうした自治都市としては、堺・博多・大湊（伊勢神宮の外港）などが知られています。町衆の結束は強固で、永正七（二五二〇）年、安濃津（現在の津市）の豪族・長野氏が桑名に矢銭を課しましたが、町衆がこの要求を拒んだため長野氏が桑名に軍勢を差し向けました。これに対して町衆は、全員が逃散するという非常手段で抵抗しました。これによって、伊勢湾一帯の輸送機能が混乱し、伊勢神宮への年貢が届かないといった問題が起ったので、神宮より長野氏に桑名からの撤退が懇願され、長野氏がこれを聞き入れ、事態が収拾されています。

### 近世桑名宿の繁栄

自由都市「十楽の津」として活況を呈した桑名でしたが、戦国期の動乱によって終焉を迎えます。尾張一円を掌握した織田信長は、永禄一〇（二五六七）年、北勢に侵攻、まず桑名に入って火を放ち、周辺の豪族を悉く調略・撃破して支配下に収めました。その後の桑名は、江戸幕府

成立まで支配領主が目まぐるしく変わっていきました。

慶長五（二六〇〇）年、関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は、翌年に東海道宿駅制度を制定し、桑名宿が設けられました。桑名宿は、海上七里の宮宿（名古屋市）および脇街道であった河上三里の佐屋宿（愛西市）への渡船場となり、係船する船場には御番所・伊勢神宮の大鳥居・灯笼・高札場が設けられ、水駅を兼ねた宿場町として発展しました。天保一四（二八四三）年の「東海道宿村大概帳」によると、桑名宿内戸数二五四軒・人口八八四八人、本陣二軒、脇本陣四軒、旅籠屋大小一二〇軒がありました。

また、中世から続いた港湾・商業都市としての役割は、幕府が江戸に



本陣



船場（久波奈名所図会）



米會所  
大々神楽（久波奈名所図会）

大坂・赤間関（下関市）の相場とともに、全国的に注目されました。桑名の米取引は明治以降も続き、明治二七（一八九四）年一月に桑名米穀取引所が開設され、昭和六（一九三二）年に同所が閉鎖となるまで、米相場の取引が行われました。

次いで多かった物資は、木曾・飛騨の山から伐採された木材で、筏に組まれて木曾三川を流送され桑名で貯木された後、船に積みこまれ、伊勢大湊・江戸・大坂など各地に送られました。二〇年毎に行われる遷宮の用材もすべて桑名を経由していました。

水運の要地として、中世より営々と発展を遂げてきた桑名湊ですが、明治になって西洋から入ってきた大型蒸気船が主流になると、水深の浅い河口部に位置する桑名湊には船が入れなくなり、物流拠点としての役割を果たせなくなりました。

#### 参考文献

- 『桑名市史 本編』桑名市 昭和三四年
  - 『三重県の地名』昭和五八年 平凡社
  - 『日本地名大辞典・三重県』
- 平成三年 角川書店

扱われた物資の第一は、全国有数の穀倉地帯・濃尾平野が産する米で、とりわけ美濃には幕府直轄地が多かったことから、大量の年貢米が桑名に集められ、大船によって江戸に運ばれました。米の集積地となった桑名には天明四（一七八四）年に米市場が開設され、その相場は江戸・

高須輪中の  
排水管理

第三編

# 高須輪中の揚水施設



木曾川

長良川

中江川

大江川

揖斐川

高須輪中の最南端

田外池から  
下流の中江川



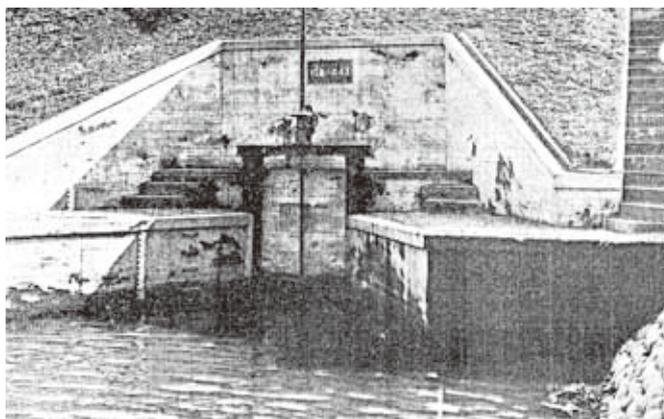
揖斐川と長良川に挟まれた高須輪中の標高は〇〜三mの北高南低の地形であり、標高一mの等高線は揖斐川左岸の平田町今尾から長良川右岸

の海津町日原<sup>ひわら</sup>を結んでいます。標高一m以下の南西部が低位部の下郷で悪水排水に苦勞し、一m以上の北東部が高位部の上郷で常に干天時に用水不足に陥っていました。田畑を水没させる悪水排水に苦勞した高須輪中は、皮肉にも、飲用や灌漑用水を天水や井戸水に依存してきたのです。

高須輪中は、江戸時代から明治初期にかけて排水幹線の江下げや排水樋門の設置に努め、明治中期頃からの機械排水機場の設置を経て、ようやく昭和初期に揖斐川からの揚水施設が設置され、現在、給排水施設を備えた田園地帯となりました。

## 一・中江用水

高須輪中で最初に建設された取水施設は中江用水です。高須輪中南西部に位置する中江地域の用水源は



揚水取り入れ水門の正面(「岐阜県海津郡中江用排水改良事業概要」より)

掘り抜き井戸、天水および中江川でありました。ここに、用水源として使用された中江川(排水幹線)は流路長約九kmで海津町福岡に発し、地域の中央低地を北から南に貫流し、海津町万寿新田地先に至り、大江閘門から揖斐川に合流する流域面積約一〇km<sup>2</sup>の小河川であります。

## 掘り抜き井戸と天水による灌漑

高位部に散在する掘り抜き井戸からの総湧出量〇・二七m<sup>3</sup>による灌漑面積は〇・六五km<sup>2</sup>と小区域であり、湧出水に含まれる「アンモニアガス」を冬季に肥料として使用しました。また、天水に頼った区域は高須町大字高須村(現高須町)や西江村大字安田新田(現海津町安田新田)の各一部(灌漑面積一・〇七km<sup>2</sup>)であります。

## 中江川からの取水

昭和に入るまで高須町の用水は中江川の上流部七カ所<sup>カ</sup>で本川を横断する立切戸堰(土堰)で堰きあげて引水(全灌漑面積五・六二km<sup>2</sup>)しましたが、下流部では、干天の場合に引水が困難であり、大江閘門を開扉して満潮時に揖斐川の塩水上の淡水を引水(アオ取水)しました。

昭和に入り中江流域からの排水が悪化したため、県営中江用排水改良事業(昭和五〜九年度)で、中江排水機場の三回目の改良(全排水量六・六八m<sup>3</sup>)を行うと共に、大江閘門をレンガ積アーチ形暗渠(長さ



田外池直上流の暗渠に改修された中江用水路

十五m、高三・一八m、幅三・三三三m、自動門扉二門）に改良して、揖斐川の満潮時に同閘門を開扉してアオ取水しました。

さらに揚水施設として、一九三四年（昭和九）年に高須町大字福岡字八幡下の揖斐川左岸に取水量一・二七<sup>㊦</sup>の中江用水取入水門と田外池（海津町稲山）までの三・一kmの用水幹線が完成しました。

### 中江取水口の設置とその後

取水施設は取水口の地形上の制約で、土砂吐と余水吐の設置が困難であったため、制水水門の前面に長さ六・四m、高さ〇・九mの越流堰（角落し）を設け、用水への土砂の混入を防ぎました。

中江取水口から取水した用水は、

一〇本の分水水路で灌漑面積六・四六km<sup>2</sup>の下流部に供給されました。

その後、県営中江

用水農業水利事業（昭和三五～四一年度）で、既設（昭和六年設置）の福岡（中江）揚水場からの取水量を二・四七<sup>㊦</sup>に増やして途中の田畑を灌漑しながら用水を田外池に入れた後、新設した東西用水幹線を通じて、中江・帆引新田土地改良区へ用水が供給されました。

さらにその後の施

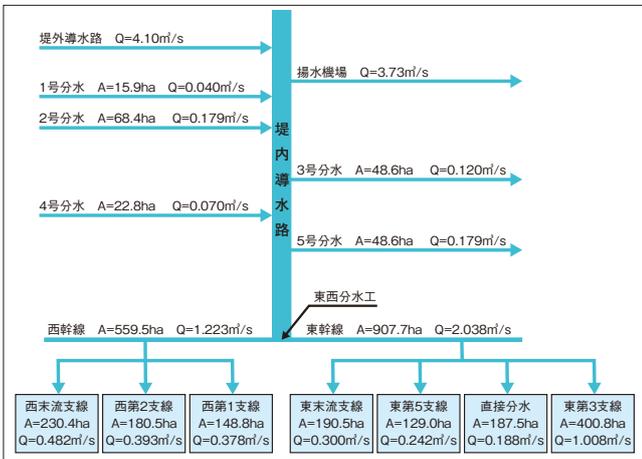


中江揚水機場

## 二・ 勝賀揚水機場

設や水路の老朽化により、国営かんがい排水事業（長良川用水、昭和五五～平成九年度）によって一九九三（平成五）年、受益面積七・五六km<sup>2</sup>とする中江揚水機場が設置され、以前と同様の揚水量二・四七<sup>㊦</sup>を取水しています。

国営長良川用水農業水利事業（昭和二二～二五年度）で、輪中北東部の高位部（今尾・海西・吉里・東江の大半）の用水源として、長良川右岸側の平田町勝賀に取水口が設けられました。取水口からは延長三五〇mの暗渠で長良川堤防を通過し、暗渠出口に三・七三<sup>㊦</sup>を取水する勝賀揚水機場が設置され、さらに揚水機場から



勝賀揚水機場からの用水系統図（『高須輪中土地改良史（事業史編）』に加筆）



決壊した樋管（『木曾三川の治水史を語る』より）

### 揚水機場による破堤

一九五二（昭和二七）年六月二四日の朝、一九五〇（昭和二五）年に施工された勝賀揚水機場の用水樋管附近の堤脚からの漏水が激しく流れ出し、九時四五分頃、海津市平田町の勝賀地先が破堤しました。

この破堤で、家屋一戸が流失、七戸が半壊、住宅の浸水一六一四戸、非住家を含めると浸水三一一九三戸におよび、田畑は約三・三km<sup>2</sup>が冠水し



水害記念碑、後方の木の後ろの建物は勝賀揚水機場

総額七億円におよぶ被害を生じました。これは当地方では、大垣城が水没した一八九六（明治二九）年以來五六年ぶりの水害でありました。

旧建設省と岐阜県が応急復旧を行い、応急仮締切り堤が災害後約一カ月の七月二七日に完成しました。現在、勝賀揚水機場の南隣に「水害紀年碑」が建っています。

## 三・ 新大江揚水機場の設置

用排水施設の老朽化と昭和三十年代からの地盤沈下による輪中南部の逆潮利用（アオ取水）区域への農業用水の安定確保の必要性が生じてきました。

そこで、揚水系統の再編を目指し、国営長良川用水農業水利事業（昭和五五～平成九年度）が行われ、中江揚水機場が旧中江取水口に新たに設置され、一九八二（昭和五七）年に勝賀揚水機場は受益面積九・二km<sup>2</sup>



新大江揚水機場

で三・七三msを取水用に全面改装されました。さらに、新設される新大江揚水機場は取水管理費の削減を図り、長良川河口堰管理水位（TP一三〇m）を活用して最大揚水量（六・四ms）の六〇％を自然流入で取水する設計で、新大江揚水機場が長良川右岸の海津町瀬古地内に建設されました。

新大江揚水機場の設置に伴い、勝賀右岸からの取水はみお筋が左岸側に寄っているため、勝賀用水で灌漑する面積をほぼ半分に減らし、勝賀かから（勝賀への給水）から

外した面積には新大江揚水機場から供給し、また、中江揚水機場からの減少した用水量も新大江揚水機場分で賄う計画がなされました。さらに、この事業で設置された六本の幹線水路は、例えば勝賀揚水機場からの勝賀西用水路が中江揚水機場に接続されるなど、各幹線水路を接続して用水の安全確保と供給が図られました。

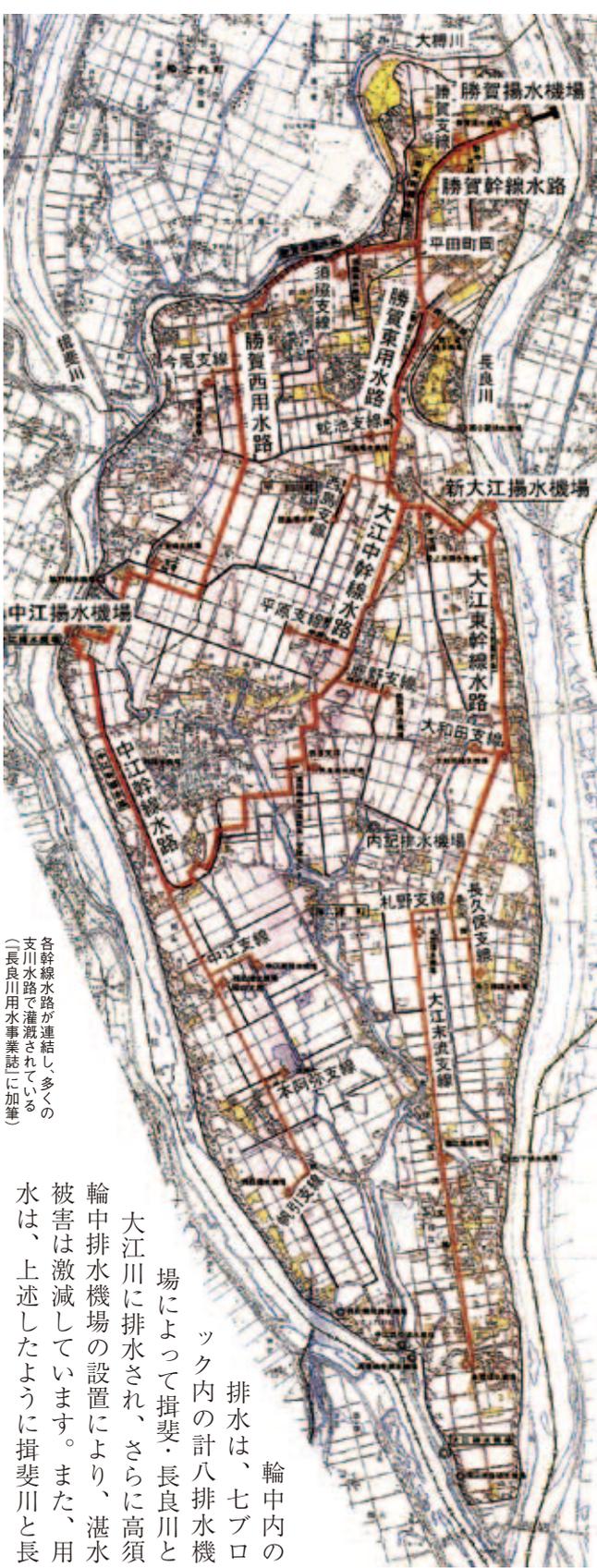
上記のシステムにより、夏期は中江揚水機場からの中江幹線水路で水地域約七五〇haを灌漑し、冬期は、勝賀東西用水路や大江中幹線水路などを利用して、中江用水系統の他に勝賀・新大江用水系統と新大江用水系統へと全域約二四三〇haを灌漑します。

機場（海津町内記）の新設と大江排水機場の改修が行われました。

#### 四・揚水機場のまとめ

これら三カ所の揚水機場で取水された用水は、六本（勝賀幹線、勝賀東西用水路、大江東・中幹線水路、中江幹線水路）の国営施工水路と、それに接続する県営かん排事業により整備された各支線用水および二カ所の加圧揚水機場へ、さらに県営ほ水管を経て各田畑に送られています。

表（下の表）は各揚水機場の受益面積や揚水量などであり、通水量の（ ）は内数で重複を示しています。但し、「総」は総延長で、「開」は開水路、「暗」は暗渠、「管」は管路の長さであります。



各幹線水路が連結し、多くの支線水路で灌漑されている（長良川用水事業誌「に加筆」）

排水は、七ブロン輪中内の場によって揖斐・長良川と大江川に排水され、さらに高須輪中排水機場の設置により、湛水被害は激減しています。また、用水は、上述したように揖斐川と長

名称 (設置場所)	受益面積 (km <sup>2</sup> )	揚水量 (m <sup>3</sup> /s)	用水路名(km)	通水量 (m <sup>3</sup> /s)	揚水機 の口径と台数
勝賀 (平田町)	9.2	3.73	勝賀幹線水路 (総1.9の内、開1.9)	3.73	1000mm、 800mm各1台
			勝賀東用水路 (総3.1の内、管3.1、大江中幹線に連絡)	(1.41)	
			勝賀西用水路 (総7.5の内、管7.5、中江揚水機場に連絡)	(1.52)	
新大江 (海津町)	13.6	6.4	大江中幹線水路 (総6.8の内、開1.2、暗1.2、管4.4)	3.51	1200mm、 1000mm、 700mm各1台
			大江東幹線水路 (総3.8の内、暗2.3、管1.5)	2.89	
中江 (海津町)	7.5	2.47	中江幹線水路 (総3.1の内、管3.1)	2.47	800mm、 700mm各1台
計	30.3	12.6		12.6	

良川に設置された計三カ所の揚水施設からの幹線水路を有機的に結び付け、安定した用水の確保がなされています。

揖斐川左岸の西小島村（海津町西小島）から南東の長良川右岸の森下村（海津町森下）に至る潮除堤が、慶長十一（一六〇六）年頃に造られてからほぼ四〇〇年の時を経て、高須輪中はようやく排水と給水施設が完備した土地となりました。今後も高須地域は、社会が要求する土地利用の変化に呼応して、大きく変わっていくことでしょう。



# 伊勢湾台風からの復興と 「木曾岬小唄」

## 大喜多 啓介



大喜多 啓介 氏

昭和50年生まれ  
愛媛大学教育学部卒業  
愛媛大学大学院教育学研究科教科教育専攻国語教育専修修士課程修了

現在  
木曾岬町教育委員会事務局教育課  
係長兼指導主事

伊勢湾台風縮切記念碑



### 一 釜石の奇跡

いまだ記憶に新しい、東日本大震災。未曾有の大災害が残したつめ跡はあまりにも深く、早期の復旧・復興を切に願うばかりですが、そんな中「釜石の奇跡」と呼ばれる危機

対応のモデルケースがあったことをご存じの方も多いと思います。

釜石市のほぼすべての小中学校の子どもたちが、大人顔負けの判断力と行動力を持って自らの力で巨大津波から逃げのびた、いわゆる「釜石の奇跡」。

授業で学んだことを活かし、小学生の手に引いて避難した中学生。そんな子どもたちの姿につら

れて、避難に転じた近隣住民もいました。結果、子どもたちは自らの命だけではなく、多くの命を救うことになったのです。後に「釜石の奇跡」と呼ばれるこの行動につながる指導をしたのが、群馬大学の片田敏孝教授です。

片田氏はその著書『命を守る教育 13・11釜石からの教訓』でこのように述べています。

いくら素晴らしい防波堤があっても、いくら頑丈な防砂ネットがあっても、人の命は守りきれません。なぜなら、東日本大震災の津波のように、防波堤などの構造物では完全に食い止めることができないような、想定を超える災害が起きる可能性は常にあるからです。（中略）釜石市の取組では、津波防災に対する意識を高めるに留めず、津波防災を文化のレベルにまで引き上げ、あえて語らせなくても『地域知』として常識化することにより、津波による犠牲

者をゼロにすることを目的に掲げました。

「想定にとらわれないう」ということは、先の大震災で得た教訓として多く語られました。想定にとらわれたことよって失われた命も少なからずありました。あまりに大きな

自然の猛威に対して、ハード面の充実はもちろん必要ですが、限界があります。想定にとらわれずありのまま自然を受け入れ災害に備えること。それを地域の文化にまで引き上げるのが、片田氏の言う「地域知」なのだと思います。

### 二 木曾岬小唄に見る「地域知」

昭和三四年九月二六日、木曾岬村（当時）を襲った台風十五号は後に伊勢湾台風と命名されました。昭和史に残る未曾有の災害として後世に



伊勢湾台風時の水位表示板

語られることとなるこの災害によって、当時の人口（木曾岬村）のおよそ一割にあたる三二八名の方が犠牲となっています。

木曾岬小唄は、伊勢湾台風から二年を経た昭和三六年、当時木曾岬中学校長であった山本忠二氏の作詞・作曲により世に送り出されました。その後昭和四〇年代にかけて踊りの輪は広がり、青年団や婦人会の方々が中心となって、盆踊り大会・敬老会・村民体育祭・文化祭などで披露されました。



やろまい夏まつりで踊り

一、ハアー霜の頃から

ビニールかけて

皆で育てた トマトやなすが  
春の日ざしにね つやを増す

ソレ木曾岬よいとこ

ほんに木曾岬よいとこ

二、ハアー夏の最中に

早植つくりや

涼し南風 田の面を渡り

波にみのりをね よせてくる

ソレ木曾岬よいとこ

ほんに木曾岬よいとこ

三、ハアー嫁を取るなら 木曾岬娘

やさし気質の 働き者よ

人に負けないね とも仕事

ソレ木曾岬よいとこ

ほんに木曾岬よいとこ

四、ハアー摘んだ新のり

かえりの舟に

木曾のお山の 白雪はえて

すくにうれしいね この日和り

ソレ木曾岬よいとこ

ほんに木曾岬よいとこ

木曾岬小唄の歌詞からは、伊勢湾台風後の木曾岬の農業の様子やたくましく生きる人々の姿をうかがい知ることができますが、全村水没の惨状を見聞きするにつけ、のどかな歌詞でありながら、伊勢湾台風か

らの復興にかける人々の並々ならぬ思いを感じることができます。

二番の歌詞に「夏の最中に早植つくりや」とあります。これは、木曾岬町に限らず木曾川下流地域に共通して見られることですが、台風の被害を避けるために収穫の時期を早める知恵で、伊勢湾台風後に米の早期栽培が急速に進められました。伊勢湾台風から五〇年余りを経た現在でも、八月の末にもなると一面きれいに刈り取られた田んぼを見ることができません。

伊勢湾台風を経験した方々からは、災害直後はそのあまりに痛ましい惨状から、「もうここには住めない」といった絶望を感じたということとを聞きます。しかし、人々が力を合わせてたくましく復興を進める中で、あえて自然の猛威に逆らわず、あるがまま自然を受け入れる形で、稲作を早生・極早生品種に切り替え、収穫の時期をずらす知恵が生み出されたことは、まさに前述した片田氏の言う「地域知」（＝想定にとらわれずありのまま自然を受け入れ災害に備えること。それを地域の文化にまで引き上げること）なのではないでしょうか。

### 三、伊勢湾台風後の風景

木曾岬小唄には、先に述べた米作りの風景のほか、農業を中心に復興

に向けてたくましく生きる人々がいきいきと描かれています。

現在、木曾岬町を訪れると、多くのビニールハウスを見ることができ、主要産業のトマトは、伊勢湾台風前の昭和三一年からビニールハウスによる栽培が始まりましたが、当時のビニールハウスは竹で作った骨組のものであったようです。伊勢湾台風によって大きな打撃を



立ち並ぶビニールハウス

受けたトマト産業でしたが、その後本格的にトマト栽培が推進され、今では「トマトの町」として町外・県外に木曾岬ブランドを発信しています。その意味で、トマトは木曾岬町にとって復興のシンボルでもあります。



トマト収穫の様子

るのです。

また、四番にうたわれている海苔養殖の風景ですが、「すくにうれしい」とは、海苔を漉く時にうれしい気持ちを感じたもので、当時は天日乾しであったことから、海苔を収穫した帰りの舟から見える晴れ晴れとした風景が人々の期待感を表現しています。

ちなみに、当時の海苔養殖の様子をよく知る方にお話を伺ったところ、伊勢湾台風によって大きな被害を受けた稲作やトマトなどの農業と違い、海苔養殖は災害直後、道具も揃ってない中再開され、しかも海が荒れたことによって豊作であったということでした。

伊勢湾台風と海苔養殖については、『伊勢湾台風 水害前線の村』



海苔そだの風景

(岡 邦行 著 ゆいぼおと) にも詳しく述べられています。

…皮肉にも超大型の伊勢湾台風により、海底のヘドロが耕されたように洗われ、新たなプラシクトンが発生。木曾三川から流れてくる淡水と海水がほどよく混じり、海苔養殖は豊作に恵まれ、品質のよい海苔が採れるようになっていた。

伊勢湾台風は数多くの災厄をもたらしましたが、海苔養殖に関しては大いに復興に役立った面があったようです。

しかし、豊作であった海苔養殖にしても現在のよう機械化された設備もなく、すべて手作業で行う真冬の海苔作り作業は厳しいものであったことが想像されますし、トマトや米作りなどと同じく、多くの苦労とふるさと復興にかける不屈の意志がなければ今の木曾岬町はなかったかと思えます。

その意味で、三

番の「やさし気質(きだて)」の働きものよ」は心に迫りますし、「一人に負けない」努力の上に今の木曾岬町があると、言っても過言ではありません。

#### 四 未来へ

伊勢湾台風からの復興にかける人々の思いが込められた木曾岬小唄。その後平成四年に作られた木曾岬音頭とともに、次代を担う子どもたちに継承していこうと、平成二二年九月「木曾岬音頭・小唄保存会」が設立されました。

保存会では、発足以来毎年町内の幼稚園・保育園と小学校二年生に踊りの指導に向かっています。かつては、中学校の運動会でPTA種目として披露されていた木曾岬小唄で



幼稚園での発表会の様子

すが、世代が替わり、今は踊れる人も少なくなってきました。

子どもたちへの指導を通じて木曾岬町に住むすべての人にこのうたを広めたい、そんな思いを込めて保存会のみなさんは日々練習に励み、様々なイベントで踊りを披露しています。

伊勢湾台風の惨禍からみごとな復興を遂げた木曾岬町。

「木曾岬よいところ ほんに木曾岬よいところ」  
元気な子どもたちの声が響き渡ります。

本原稿を執筆するにあたり、木曾岬音頭・小唄保存会会長の内田としゑさんをはじめ、伊藤たつ子さん・宇佐美幸子さんから、当時の木曾岬町の暮らしや農業・漁業について貴重なお話をうかがうことができました。紙面を借りてお礼申し上げます。



町民文化祭で踊りを披露

#### 参考文献

- 『木曾岬町史』 木曾岬町
- 『命を守る教育 3・11釜石からの教訓』 片田 敏孝 著・PHP研究所
- 『伊勢湾台風 水害前線の村』 岡 邦行 著・ゆいぼおと
- 『伊勢湾台風から50年』 木曾岬町教育委員会
- 『稲作大百科 第2版 1』 農文協編・農山漁村文化協会
- 『発展する木曾岬の農業』 木曾岬町
- 『木曾岬村施設園芸の動向』 木曾岬町
- 『KISOSAKI 粋き・生き』 木曾岬町
- 『木曾岬村園芸共販20周年記念大会 冊子』

# 井戸に落ちた雷さま(桑名市赤須賀)

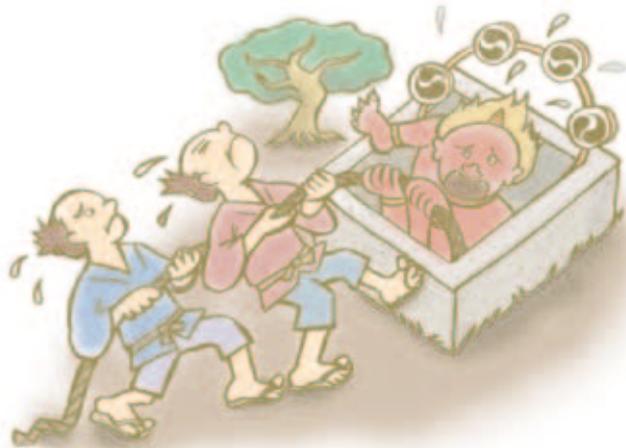
昔々、すさまじい稲光とともに赤い体の雷さまが、赤須賀村の井戸に、まっさかさまに落ちてきました。

村人が恐るおそる井戸の中をのぞいて見ると、雷さまが「助けてくれ」と泣いていたので、村人は「人の家を散々焼いておいて、助けてくれとはむしのいい」と井戸にふたをしてしまいました。

なんとか井戸から出ようと試した雷さまも、どうにもならなかったので、「もうここには雷を落としませんから、どうかふたを開けてください」と懇願しました。

さすがにかわいそうになった村人が、「それならふたを開けてやるから、何か置いていけ」と言いますと、「背中に背負った太鼓を井戸に残していく」と返事があったので、ふたをとってやりました。助けられた雷さまは、「いやになるくらい水を入れておくから、この井戸は年中枯れることはなくなるぞ」と言っただけで空に帰っていきました。

その井戸はいつまでも枯れることがなく、また年中、井戸の底から太鼓の音が響いてきたそうです。



## 編集後記

歴史記録は、「高須輪中の排水管理」の第三編として、高須輪中内の揚水施設を取り上げました。また研究資料は、木曾岬町教育委員会の大喜多氏に「木曾川小唄」について寄稿いただきました。

なお、この資料は、創刊号からの全てがKISSOホームページよりダウンロードできます。

表紙写真

上  
「鎮国守神社」

天明4年(1784)白河(現福島県白河市)城内に松平定綱(鎮国公)を祀ったのが始まり。文政6年(1823)白河から桑名へ移封にともない当社も桑名城本丸に移りました。

下  
「赤須賀漁港」

七里の渡しより少し下流の赤須賀漁港から損斐・長良川河口を望みました。赤須賀漁港は江戸時代よりハマグリ・シジミ漁で栄えた港です。正面の赤い橋は、国道23号の損斐長良大橋です。

## 木曾川文庫利用案内

ヨハニス・デ・レイケに関する文献など約4,500点の図書などを収蔵、木曾三川の歴史を知るために、多くの方々のご利用をお待ちしています。



《開館時間》  
午前8時30分～午後4時30分

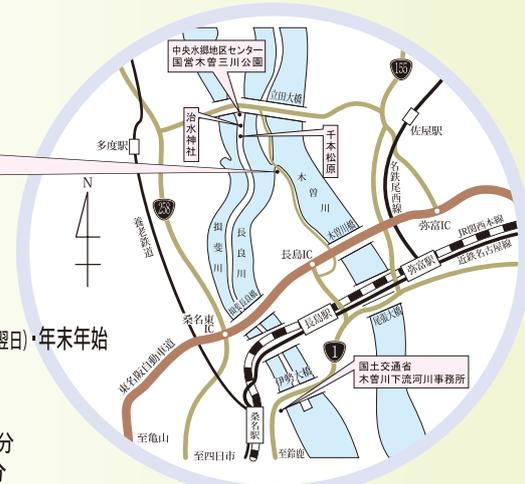
《休館日》  
毎週月・火曜日(月・火曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》  
国道1号尾張大橋西詰から車で約10分  
名神羽島ICから車で約30分  
東名阪長島ICから車で約10分

木曾川文庫へのお問い合わせは

〒496-0946 愛知県愛西市立田町福原  
TEL.0567-24-6233 FAX.0567-24-5166  
Mail kisogawabunk@mist.ocn.ne.jp



KISSOホームページ

<http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/index.html>

Johannis de Rijke の日本語表示については、かつては「ヨハネス・デ・レーケ」と呼ばれていましたが、「KISSO」では、現在多く使われている「ヨハニス・デ・レイケ」と表記しています。

『KISSO』Vol.86 平成25年4月発行

編集 木曾三川歴史文化資料編集検討会(桑名市、木曾岬町、海津市、愛西市、弥富市ほか)

発行 国土交通省中部地方整備局木曾川下流河川事務所調査課

〒511-0002 三重県桑名市大字福島465

TEL(0594)24-5715 ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/>